様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０４４８０

研究課題名（和文）東アジアを視野においた古典化への参加プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of participation program in classicalization in the East Asia field

研究代表者
甲斐　雄一郎（KAI, Yuichiro）

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：７０１６９３７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：近年の全国学力・学習状況調査等において、中学生における古典学習への学習意欲の低下が明らかになった。そこで、内外の教育関係者の協力を得て学習者の視野を海外における古典学習にまで広げることとした。漢文、とりわけ論語は日本にとどまらず、東アジアの多くの国・地域における学校教育に位置づけられており、これらの地域における学習のための共通素材である。この点に着目し、「古典化への参加」、そして「読書集団の拡張」という二点からこの課題に取り組んだ。成果として日本、中国、台湾の中学生による論語を巡るエッセイ集を収集して発行するとともに、それぞれの国や地域における読み取り態度の異同について気づかせることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中国、台湾、日本の中学生が書いた論語をめぐる随筆の検討を通して、叙事文、説明文、議論文という類型を見出すとともに、それぞれの国や地域においてその類型に偏りがあることが明らかになった。あわせて作品の良否について評価を試みてもらったところ、評価者が属する国や地域の作品が高く評価される傾向がみられた。この結果からは同一の国や地域内においてはエッセイに関する何らかの評価基準が存在すること、そして随筆については国境を越えて共通する評価基準が存在しないことが示唆された。これらは日本における漢文学習、また随筆の指導を意義づけるとともに、具体的な指導方法を検討する手がかりとなることが期待される。

研究成果の概要（英文）：In recent research on learning situations, etc., it has become clear that junior high school students have a decline in their willingness to learn classics. Therefore, with the cooperation of educators at home and abroad, we decided to extend the perspective of learners to classical learning abroad.
Chinese classics, in particular, “Rongo” are also located in school education in many countries and regions of East Asia, as well as Japan, and are general teaching materials for learning in these regions. Focusing on this point, we tackled this task from the two points of "participation in classicalization" and "expansion of the reading group". As a result, I was able to put together an essay on Japanese and Chinese junior high school students' essays on "Rongo" and make them aware of differences in reading attitudes in each country and region.

研究分野：国語教育

キーワード：古典化への参加　古典学習　論語　比較国語教育

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）中学校における古典教育の課題

現在の日本の国語科には小学校から高等学校にいたるまで、漢文が位置づけられている。しかし近年の各種調査の結果、中学校の生徒による古典学習に対する興味・関心、また古典学習の意義に関する意識が低調であることが指摘されている。2013 年度の全国学力・学習状況調査における中学校調査では古典学習への選好を問う質問に対し、肯定的な回答をした生徒が 29.3%にとどまったという報告がその一例である。こうした事実をふまえ、2015 年の中央教育審議会・教育課程企画特別部会では、国語科において「更なる充実が求められる」課題の一つとして「古典を学習する楽しさや学習する意義の実感」を高めることを挙げている（論点整理「５各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性（２）各教科・科目等の内容の見直し②国語」）

（２）教育課題としての交流

現行の学習指導要領において感想や意見などの交流に関わる内容は、国語科の領域を横断するとともに、小学校から高等学校までを縦断している。ここでそのような交流を実現する単位を読書集団と名付けることにする。ここにおける広義の対話に注目する。島崎隆（1983）は対話の機能の一つとして「他人との対話的コミュニケーションが個人のなかに内在化されてそこで初めて自律的に考えることが可能になる」ことを挙げている①。ここでの「他人」は個々の生徒にとってそれぞれの発言に対して反応を返す学級、学年、学校内、あるいは学校をこえた学習コミュニティ内の存在であり、彼らとのコミュニケーションの経験の蓄積とその内在化が「自律的に考えること」を可能にするというわけである。本来はそうした経験が今日求められる「古典を学習する楽しさや学習する意義の実感」に結びつくはずであるが、そこに困難があるとするならば、それは一つには生活や読み取りの観点の限定にも原因を求めることができるかもしれない。個々の作品の趣旨や選択された場面に学級内で大きな差が見出せない例が続くならば、交流についての関心の維持は困難だろう。

（３）東アジア共通教材としての論語と読むことの研究動向

「古典を学習する楽しさや学習する意義の実感」については上記の指摘以前から国語教育界においてさまざまな試みが展開されてきた。漢文、とりわけ論語は日本にとどまらず、東アジアの多くの国・地域における学校教育に位置づけられており、これらの地域における学習のための共通素材である。また、中国、台湾、日本の教科書によって論語の学習内容を検討してみたならば、これらの国や地域においては章句の内容を現代の生活や社会にあてはめて検討してみることがもとめられているという点においても共通している②。

「古典化への参加」とは時代を隔てた読者による意味付けの反復によって、ある文章が古典となった（古典化した）と主張する外山滋比古（）の古典論に基づくものである③。論語は 1902 年の中学校教授要目以降、教育課程に継続して位置付けられてきた。この時以降今日までの論語の「読者」として想定されるのは、論語研究者のみならず、教育行政、教科書編集、授業実践等、学校教育に関わる関係者に加えて学習者自身である。外山の主張によるならば、こうした立場の人々が論語に対して新しい意味を見出し続けてきたことによって、学校教育における古典として存在してきたのである。このことを本研究では読者による古典化の営みの所産であると考えるのである。そしてこの観点からみるならば、現在の論語の学習指導についても中学生や高校生もまた彼らなりの論語の理解を通して「新しい意味を読み取る」活動を続け、論語の古典化に参加することが求められているのである。

２．研究の目的

上記の背景をふまえて、以下の二つを研究の目的とした

（１）古典化の類型の発見

論語について、「章句の内容を現代の生活や社会にあてはめて検討」した結果は随筆としてまとめることができる。随筆の特性として作品の構造に厳格な枠組みはない。中国、台湾、日本、それぞれの国や地域の中学生が執筆した随筆に基づき、それぞれの固有の枠組みの有無を検討することが目的の一つである。

（２）交流による変容の検討

中国、台湾、日本、それぞれにおける評価の観点とその変容の有無についての発見がもう一つの目的である。それぞれの国や地域の作品を執筆者はもとより教育関係者たちがどのように評価するのか、またその評価は固定的なものか変動もありうるのか、ということについての検討を行うことにする。

３．研究の方法

（１）随筆作品の作成

中国、台湾、日本の中学校の教科書に掲載された論語の章句を検討したうえで、以下の八章を選び、中国（浙江省台州市）、台湾（台北市・板橋市）、日本（東京都）の中学校に依頼してそれぞれ担当教員の授業において随筆を作成してもらうようにした。

①　学而時習之。不亦説乎。有朋自遠方来。不亦楽乎。人不知而不慍。不亦君子乎。（学而）

②　温故而知新。可以為師矣。（為政）

③　学而不思則罔。思而不学則殆。（為政）

④　子曰。由。誨女知之乎。知之為知之。不知為不知。是知也。（為政）
⑤　剛毅木訥。近仁。（子路）
⑥　君子和而不同。小人同而不和。（子路）
⑦　子貢問曰。有一言而可以終身行之者乎。 子曰。其恕乎。己所不欲。勿施於人。（衛霊公）
⑧　過而不改。是謂過矣。（衛霊公）

依頼内容は以下の通りである。

１）　①～⑧のうちの一つを選び、自分の経験や現代の社会にあてはめて考えた随筆を書く。
２）分量はタイトルを含んで６００～８００字（中国、台湾の場合）。

そのうえで担当教員には自分自身の判断で 50 編ほど選出すること、その際、①～⑧の偏りは問わないことを伝えた。

このようにした収集した作品について協力者に翻訳を依頼し、最終的にそれぞれ４０編余、合計１３０編余を選択した文集を刊行する。

（２）評価の交流

上記文集完成の途上で中国、台湾、日本で中学生、また言語教育にかかわる教員や教員をめざす大学生にそれぞれの作文に関して自分自身が考える「よい随筆の条件」をふまえて評価をしてもらう。書き手の属する国に関わる情報の有無による差異も検討するようにする。

４．研究成果

（１）文集の刊行及び作品分析

３（１）で挙げた随筆集を『中国大陸、台湾、日本　中学生が読んだ論語』を中国語訳を付した『中國大陸、臺灣、日本　國中生讀論語』とともに刊行することができた。

本研究の課題としての「参加プログラム開発」のポイントは、異なる国や地域との間の交流を前提とした場合の交流の観点と交流の方法についての提示である。本研究での帰結として相互に関連し合う（１）選択された章句、（２）理解の様式、そして（３）類比される素材の三点が挙げられる。このうち（１）については作品精選の過程について条件を付さなかったため十分に検討できなかったものに、（２）（３）においてある程度の成果を挙げることができた。

理解の様式とは論語を生活や社会にあてはめてみるための具体的な方法である。ここではいささか古いものの佐々政一（1917）の枠組みによった。佐々は鮮明な分類は難しいとしつつも文体の種類として記事文、叙事文、説明文、議論文、勧誘文の五類型を示している。これらのうちエッセイで採用されるのは叙事文、説明文、議論文が多い。中国は特色や実例を挙げて事態を説明しようとした説明文型、台湾は理由を挙げて主張を行おうとする議論文型、日本はあるできごとについて時系列に基づいて描写したうえで自らの感想を述べた叙事文型の特徴を、それぞれに見出すことができた。今回の依頼に関しては随筆をどのように書くか、という指導を先行させることは求めていない。したがって生徒たちが最もなじんだ書き方に即して書かれたものがこれらの様式だとするならば、選択された様式によって国や地域における標準的な様式を見出すことができるだろう。

類比される素材とは、理解の様式と関連するものである。すなわち説明文型の場合は選択された実例、議論文の場合は選択された問題の場とそれを支える事実、そして叙事文型の場合は選択された場面と事件、問題状況などがそれに相当する。それぞれの作品にはいくつもの共通点が指摘できる一方で、日本の場合は自らの活動体験が選択されることが多いのに対し、中国や台湾の随筆が歴史や一般的な社会生活、政府の在り方など、より広い視野から素材を選択していることが明らかになった。

（２）評価の交流

この課題については十全の成果を挙げたとは言えず、継続する課題としたいと考えている。これまで中国、台湾、日本、それぞれの中学生や教員、大学生に対し、いずれも私的な局面で、書き手の国籍を伏せたまま、作品の良否について直感的な評価を依頼したところ、多くの場合、それぞれが所属する国や地域の作品が高く評価される傾向がみられた。この帰結は、随筆については国境を越えて共通する文章評価の基準は存在しないことを示す。現行の国語科では随筆を書く目的、また書かれた作品の評価基準については抽象度の高いレベルでの合意にとどまっているのが現状である。その結果、学習指導要領などが求める、児童生徒が「自分自身がもっているものの見方や考え方、生き方などを見つめ直したり深めたりする」活動がどのようなもので、小中学校に求める水準がどこまでのものか、ということについての議論が不在であった。こうした状況に中国大陸や台湾での実態を対比させたならば、おのずと日本の作文指導、とりわけ随筆の指導における教育内容を鮮明にし、あるいは拡張することの必要性の有無を検討する契機になることが期待される。

それはエッセイそれ自体の教育内容に関する見直しのみならず、古典学習に関しても、これまでも求められてきた「内容を自分の経験や現代の社会にあてはめて考えてみること」とする教育内容それ自体について、具体的な手立てを検討する手がかりとなるだろう。同時に日本、中国大陸、台湾の間でこうした作品の交流を継続することによって、それぞれの中学生たちの相互の理解が容易になることが期待される。今後の課題としたい。

＜引用文献＞

① 島崎隆、増補新版　対話の哲学、こうち書房、1993、71
② 古珮玲・李有珠・勘米良祐太・勝田光・劉晏君・飯田和明、漢字文化圏における漢文教材－現行の中学校国語教科書所収の『論語』教材を通して－、人文科教育研究、第 37 号、2010
③ 外山滋比古、諸説紛々、『古典論』みすず書房、2001、pp.113－114

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　２　件）
① 甲斐雄一郎、東アジアを視野においた古典化への 参加プログラムの開発（概要）、筑波教育学研究、査読無、第 17 号、2019、pp.19-27
② 甲斐雄一郎、国語科教育の現状と課題－古典学習に関する二つの視点から－、季刊理想、119、2016、pp.9-10

〔学会発表〕（計　４　件）
① 甲斐雄一郎、日本語言教学動向以及中国古典文学的地位、台湾国家教育研究院・「古文教学：日本中学的国文教育」交流座談、2018
② 甲斐雄一郎、日本母語教育課程改革及母語教師培養、中国華東師範大学教師教育学院講座、2017
③ 甲斐雄一郎、教科書から見た日本の国語教育、中国浙江師範大学外国語学院講座、2016
④ 甲斐雄一郎、中日中学生の「論語」学習比較研究、中国東北師範大学、中日道徳教育シンポジウム、2015

〔図書〕（計２件）
① 甲斐雄一郎、筑波大学人間系、中国大陸、台湾、日本　中学生が読んだ論語、2019、73
② 甲斐雄一郎、筑波大学人間系、中國大陸、臺灣、日本　國中生讀論語　2019、129
（①に中国語訳を添えたもの）

〔産業財産権〕　なし

〔その他〕　なし

６．研究組織
（１）研究分担者　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。